

植民者の抱く郷愁

エリトリア生まれのイタリア人作家が描く〈故郷〉の姿

栗原俊秀

I. はじめに

アフリカの北東に位置する小国エリトリアは、古くは南方のエチオピア、16世紀以降はオスマン帝国、そして、19世紀末から20世紀の半ばにかけてはイタリアに支配されてきた歴史を持つ。

16世紀初頭、オスマン帝国はアフリカ北東の紅海沿岸まで進出し、それからおよそ4世紀にわたり、港湾都市マッサワをはじめとするエリトリアの沿岸地域を支配下に置いた。エリトリアの北部高原、西部低地、東部沿岸地域には、現在も多くのムスリムが暮らしている。歴史的・地理的な観点から言って、16世紀から19世紀にかけてのエリトリアは、中東世界の辺境、中東の最果ての地とも呼ぶべき地域であった。

日本と同様、19世紀の後半になってはじめて近代化を成し遂げたイタリアは、西洋列強の植民地主義に対抗すべく、1880年代にアフリカの紅海沿岸地域に進出する。その結果、当時はエチオピア領であったアッサブから、エリトリアのマッサワにいたるまでの地域が、「エリトリア植民地」としてイタリアの支配下に置かれることになる。その半世紀後、第2次大戦初期の1941年、イギリス軍が同地域を占領し、イタリアはエリトリアにおける主権を失う。エリトリア史は、イタリアが宗主国として君臨した1890年から1941年までの半世紀を、「イタリア植民地時代」と呼ぶ。

II. エリトリア生まれのイタリア人作家

本稿では、イタリア植民地時代の末期にあたる1938年にエリトリアで生を受けた、イタリア人作家エルミニア・デッローロの生と作品について考察する。とくに、彼女のデビュー作である自伝的長篇小説『アスマラよ、さようなら (*Asmara addio*)』に焦点を当て、植民者が抱く郷愁（イタリア語では *nostalgia*）の感情について検討を行いたい。

エリトリアの首都アスマラで生まれ育ったデッローロは、20歳でミラノに移住している。以後、現在にいたるまでイタリアに暮らしているものの、エリトリアとの関係は途切

れることなく続いた。2016年に刊行された『目の前の海 (*Il mare davanti*)』という著作は、エリトリアの青年ツェゲハンスの実体験をもとにしたルポルタージュ文学である。デッローロは寡作であり、発表した小説の数は少ないとはいえ、そのすべてがエリトリアとなんらかの形でかかわりを持っている。デッローロの作品において、生まれ故郷エリトリアが果たす役割はきわめて重要であり、エリトリアを抜きにして彼女の文学について語ることはできない。

デッローロは児童文学の書き手でもあり、20年以上にわたるキャリアをとおして10を超える児童書を発表している。2005年に刊行された『海の向こう側から (*Dall'altra parte del mare*)』という作品では、北アフリカから地中海を渡ってイタリアを目指す、幼いエリトリア人少女の命がけの旅が描かれている。この作品の冒頭で、デッローロは小さな読者たちに向けて次のように語っている。

これからお話しする物語の一部は、エリトリアを舞台にしています。この本の主人公は、エリトリアの人たちです。わたしがエリトリアの物語を書くのは、この国とわたしのあいだに強い結びつきがあるからです。わたしはエリトリアで生まれました。エリトリアはアフリカにある国です。この土地には、勇敢な人たちが暮らしています。ことあるごとに、大きな痛みと不正に虐げられてきた人びとです。

さて、これからわたしは、どうして自分はアフリカに生まれたのにイタリア人であり、それでも自分をエリトリア人でもあると思っているのか、皆さんに説明しましょう。¹

イタリアでは、デッローロはしばしば 'scrittrice italo-eritrea'、イタロ・エリトリアの作家と呼ばれる。英仏西などと比較して、イタリアが国外に植民地を有していた時代は極端に短く、その地理的な広がりも、列強の一角として胸を張れるようなものではなかった。そうした背景もあってか、イタリア語文学には、植民地主義時代の証言たり得る作品がきわめて乏しい。『アスマラよ、さようなら』をはじめとするデッローロの一連の小説は、文学をとおしてアフリカにおけるイタリアの植民地政策について伝えるほとんど唯一の例であり、ポスト・コロニアル研究の対象としても確固たる存在感を有している。

¹ Erminia Dell'Oro, *Dall'altra parte del mare*, Il battello a vapore, Milano, 2005, p. 5.

III. 自伝的長篇『アスマラよ、さようなら』

1988年、作家が50歳になる年に刊行された『アスマラよ、さようなら』は、著者自身を思わせる女性を語り手に据えた自伝的長篇で、全体は3部に分かれている。第1部には、語り手の父方・母方の祖父母がエリトリアに入植するまでの経緯や、語り手の両親の出会いが綴られている。第2部では、語り手本人の物語が叙述の中心となる。幼年期から青年期にかけての日常を描いたのち、語り手がアスマラを去りイタリアへ旅立つ場面を提示して、第2部は幕を閉じる。第3部における語り手は、すでにイタリアでジャーナリストになっている。そんな彼女が、エチオピアに併合された生まれ故郷を再訪し、自身のルーツと向き合うことになる。

イタリアの植民地となる以前、すなわち、オスマン帝国の版図だった時代、エリトリアの首都は紅海沿岸の港町マッサワだった。イタリア人は、新たな首都として標高2400メートルに位置するアスマラを選定し、入植者のための都市を建設した。以後、1962年にエチオピアの1州としてエリトリアが併合されるまでのあいだ、アスマラはエリトリアの首都でありつづける（1993年、エリトリアがエチオピアから独立した際に、アスマラはふたたびエリトリアの首都となる）。

フィリッポ（語り手の父方の祖父）がはじめてエリトリアの土を踏んだのは、「エリトリア植民地」が成立してからまだ10年もたっていない、1897年のことだった。そのころのアスマラは、「わずかなあばら家と、舗装されていない小道」しか見当たらない、「ちっぽけな村落」でしかなかった²。そんなアスマラを、フィリッポたち入植者が、イタリア人のための町に作り変えていく。

1930年代に入ってから、ファシズム政権が台頭し、イタリアはふたたび植民地政策を推し進める。1936年には、宿願が叶い、エリトリアの南に位置する大国エチオピアを支配下に置くことに成功する。こうして、エリトリア・エチオピアの両地域を合わせた、「イタリア領エチオピア帝国」が誕生する（もっとも、すでに触れたとおり、それからわずか数年後の1941年には、イギリスが同地域を占領し、イタリアは宗主国としての立場を失う）。『アスマラよ、さようなら』には、「帝国」時代のアスマラの様子が丁寧に描写されている。

² Erminia Dell'Oro, *Asmara Addio*, Baldini & Castoldi, Torino, 1997[1988], p. 16.

エリトリアでもっとも古い建造物のひとつである、レンガ造りの古い大聖堂に面したムッソリーニ大通りは、道行く人びとに日陰を提供する棕櫚の木立ちと、街いちばんの目抜き通りであることを知らしめるその名称を、誇らしげにひけらかしていた。噴水の設えられた小さな広場が夾竹桃の香りを漂わせ、邸宅の庭園にはつねに花が咲きこぼれ、優雅な屋敷や学校や病院が瞬く間に建てられていった。³

イタリア人の入植がはじまってからおよそ40年のあいだに、アスマラは多民族の入り乱れる国際的な都市に変貌していた。作中の記述によれば、この時代のアスマラには、カトリックや東方正教の教会をはじめ、イスラームのモスク、ユダヤ教のシナゴグ、そして、5世紀前後からこの土地に根づいていた、コプト派エリトリア正教の教会が点在していたという。なお、アスマラの東にそびえるビゼンという山の頂には、5世紀からつづくコプトの修道院が建っており、デッローロは自作のなかでたびたびこの修道院に言及している。

先に引用した児童書の一節で、デッローロは自身のアイデンティティに言及し、「自分はアフリカに生まれたのにイタリア人であり、それでも自分をエリトリア人でもあると思っている」と述べていた。しかし、言うまでもないことだが、植民地時代のエリトリアで、イタリア人とエリトリア人が分け隔てなく交流していたわけではない。容易に想像できるように、植民者と被植民者のあいだには、けっして乗り越えることのできない壁があった。『アスマラよ、さようなら』には、同じ土地に存在する2つの世界が、次のように描かれている。

小ぶりの婦人帽、ヴェール、パイプ、ステッキ……これらはすべて、白人たちのアスマラだった。かつては「ムッソリーニ大通り」と呼ばれ、やがて「イタリア大通り」と名を変える街道で、エリトリア人の姿を見かけることはなかった。都市部のエリトリア人は、アスマラ近郊のアッバシャウルで、何世紀も前からつづく貧窮を生きのびていた。⁴

植民者の家庭ではたいていの場合、住み込みまたは通いの形で、エリトリア人の使用人

³ *Ibid.*, p. 34.

⁴ *Ibid.*, p. 22.

が働いていた。『アスマラよ、さようなら』にも、多くのエリトリア人使用人が登場し、物語にいろどりを添えている。たとえば、語り手の父方の祖父母が存命だったころから、35年にわたり語り手の家庭で洗濯女として働いていたトゥルというエリトリア人女性は、少女時代の語り手の想像力に決定的な影響を与えた人物として描写されている。

トゥルは小柄で、ものすごく痩せていて、くすんだ色のぼろ服を身にまとっていた。エリトリアの貧しい人々が着ている服の、典型的な色合いだった。小さな布きれがトゥルの体をすっぽり覆い、腕だけがむき出しになっていた。トゥルの腕は細く、長く、黒いニス塗られた骨のようだった。深い黒に染まった顔は、一枚の地図に見えた。そこには時間が、巧みな手腕で辛抱よく、蛇のように身をよじらず皺を刻みこんでいた。顔の皺は島や大陸、それに運河を形づくり、そこを汗の小川がちよろちよろと流れていた。頭髪は完全に剃られていた。トゥルが笑うと、口の真ん中に一本の歯が見えた。それはトゥルに残された最後の歯で、ぐらぐらと揺れながらも、しぶとく歯ぐきにしがみついていた。⁵

マフラスクという、通いの女中として働く若いエリトリア人女性は、少女時代の語り手の大切な友人だった。マフラスクが通うある家庭では、日中はマフラスクに息子を託し、二人を毎日映画館に通わせていた。マフラスクが語り手ミレーナに家庭に働きに来たとき、彼女はミレーナに映画の内容をすみずみまで語って聞かせる。ミレーナはその返礼として、自分が読んださまざまな小説のあらすじをマフラスクに話していた。たとえば、あるときミレーナがマフラスクに紹介したピノッキオは、すぐに二人にとってのお気に入りのキャラクターになったという。こうして、マフラスクとミレーナは、互いの想像力に刺激を与え、頭のなかに広がる物語の世界を豊かにしていく。

ちなみに、語り手ミレーナとエリトリア人とのコミュニケーションは、すべてイタリア語で行われている。植民者の家庭で働くエリトリア人の多くはイタリア語に堪能であったため、イタリア人は現地の言葉を修得する必要がなかった。デッローロは、エリトリアの言語であるティグリニャ語を話すことができず、『アスマラよ、さようなら』の文章も、挨拶をはじめごく単純な語彙にティグリニャ語が用いられているほかは、すべて標準イタリア語で叙述されている。

⁵ *Ibid.*, p. 23.

前述のマフラスクというエリトリア人女中は、ある痛ましい出来事のために若くして命を落とす。舌に膿胞ができていることに気づき、語り手の両親からイタリア人の医師にかかることを勧められたにもかかわらず、マフラスクは実家のある村に帰り、エリトリア人の老医師に治療を頼む。老医師は、鉄の棒を炎で加熱し、膿胞を焼いた。あまりの痛みマフラスクは絶叫し、実家に戻ってからもずっと、床に転がりながら呻きつづける。そして翌朝、彼女の体は冷たくなっていた。マフラスクの死の報せは、語り手の家庭に深い悲しみをもたらした。

「ばかげてる」父さんが言った。「わざわざ未開人のところに行って殺されたのか」
そこまで言う前から、傍らにわたしがいることに気がついた。「残念だよ」父さんは
言い足した。「ほんとうに賢い子だったのにな」⁶

こうした描写から、語り手の父親の、エリトリア人にたいする意識が透けて見える。デッローロはあるインタビューのなかで、自身の父親が「まぎれもないパターナリスト」であったことを認めつつ、エリトリア人の使用人に対して彼がつねに敬意を払っていた点も強調している⁷。ここに引用した一節は、普段はエリトリア人に丁寧な態度で接していた父親が、不合理な悲劇に接するに及んで、ふと本音を漏らした場面として読めるだろう。デッローロの父親は、大多数のイタリア人とは異なり、現地の言葉であるティグリニヤ語や、事業で必要となるアラビア語まで使いこなす開明的な人物だった。植民者の第2世代として生まれ、イタリアが宗主国の立場を失ったあともエリトリアに留まりつづけた彼は、出自に由来する特権的な立場をごく自然に享受しつつも、エリトリア人に対しては同胞としての意識を抱き、エリトリアを自らの祖国と捉えていた。

IV. 植民者が抱く郷愁 (nostalgia)

イギリス軍の進駐を受け、「イタリア領エチオピア帝国」が瓦解したのち、多くの植民者はエリトリアから去っていった。そのなかには、語り手ミレーナの母方の祖父母も含ま

⁶ *Ibid.*, p. 106.

⁷ http://archivio.el-ghibli.org/index.php%3Fid=2&issue=00_02&sesezione=7.html (2018年6月7日閲覧)。以下に、当該箇所を訳出する。「父はまぎれもない植民者であり、パターナリストでした。それは確かです。けれど同時に、父はわたしたちの家で働くエリトリア人たちにつねに敬意を払っていました。わたしは一度も、父が使用人を罵っているのを聞いたことはありません」

れている。この祖父母はユダヤ系で、アフリカに来る前はイタリアのミラノに暮らしていた。しかし、1930年代後半から、ファシズム政権によるユダヤ人排斥の動きが顕在化し、二人は危険を逃れるために、娘とともにアフリカへ渡った。語り手ミレーナの祖父エーリッヒは、ファシズム政権が崩壊した後、イタリアへ戻ることを決心する。

「リア、イタリアに戻るぞ」エーリッヒが割って入った。

「イタリア？」リアは仰天して夫を見つめた。

「ああ」エーリッヒは愛情をこめて妻の肩に腕をまわした。「帰るときだ。わたしはイタリアで死にたい」

「でも、エーリッヒ、まだ時間はあるわ。あなたはじゅうぶん若いし、体だってどこも悪くないし……」

「時間が残ってるかなんてわかるもんか。家に帰るぞ。急ごう」

「家ですって？」ますます困惑を深めつつ、リアは夫の顔を凝視した。「どの家のことを言ってるの？ あなたはいつも、わたしたちの家はいたるところにあるって言ってたのに」

(……)

リアは返事をしなかった。ミラノや、もうずっと会っていない親戚や、ポルタ・マジェンタや、青春時代を過ごしたいくつもの通りに思いをめぐらす。刃物の研ぎ師や傘売りの声、焼き栗の味、窓枠に降り積もる雪が、記憶のなかによみがえる。地中深くに埋まっていた郷愁 [nostalgia] が、真紅の花に覆われた木々や春の香りを、リアのもとに運んできた。⁸

祖国への郷愁に袖を引かれるようにして、植民者たちはエリトリアをあとにしていく。一方で、引揚げ者のなかには、祖国イタリアで日々を送りながら、アフリカへの郷愁を募らせる人びともいた。その一例が、語り手の友人であるリゼッタという少女の父親である。リゼッタは、イタリア人の父親とエリトリア人の母親のあいだに生まれた混血児だった。ただし、リゼッタの母親は内縁の妻であり、リゼッタの父親はイタリアに家庭を持っていた。ところが、いざイタリアに戻ってみると、妻はすでに別の男性と暮らしており、子供たちも彼に取り合おうとしなかった。

⁸ *Ibid.*, pp. 137-138.

ラティーナのそばにある収容所で、彼 [=リゼッタの父親] は寝床を与えられた。ほかの引揚げ者たちもいっしょだった。二度と帰ることは叶わないと知りながら、彼らはアフリカへの郷愁 [nostalgia] を噛みしめていた。

「それで？」収容所のなかを歩きまわり、はじめて目にするかのような灰色の冬の光を陰鬱な思いで見つめながら、彼は言った。「向こうに戻って、俺はなにをやったらいいんだ？」

「またタクシーの運転手を始めたらいいじゃないか」もうひとりの郷愁者 [nostalgico] が返事をした（郷愁者、すなわちエリトリアやエチオピアから戻ってきたイタリア人は、いわゆる「アフリカ病」を患う人たちだった）。

「向こうじゃもう、一銭も稼げないさ。今更遅い。俺たちは帰国したんだ。はるばる徒歩で戻ったとしても、アフリカは俺たちのことなんてきれいに忘れてるよ」

「徒歩か」また別の声が響いた。「俺だって、徒歩でもなんでも戻りたいと思ってる。夜になるといつも、アフリカにいる夢を見るんだ。それで、目を覚ましたときには、この世から消えたくなる」⁹

こうして、引揚げ者を集めた収容所のなかで、リゼッタの父親はアフリカに思いを馳せる。エリトリアに残してきた内縁の妻や娘に、どうにかして金を送ってやりたいものの、今のところはなんの手立ても思いつかない。ここに引用した箇所には、「灰色の冬の光」という一節がある。冬という季節も、くすんだ色の陽光も、アフリカでの生活にはついで縁のないものだった。収容所を包みこむ陰鬱な空気を吸いながら、引揚げ者たちはエリトリアの真っ青な空の下に帰りたいと切望する。著者はこうした文脈のもとで、移民や難民を描く文学が広く共有する主題、すなわち、「アイデンティティの喪失」というモチーフを取り上げる。

行く先を失った人びとは、その悲しい収容所のなかを当てどもなくさまよっていた。鞆の中には郷愁 [nostalgie] と、すぐに片づけなければならない手続き書類と、希望と失望とが詰まっていた。この人たちはたいていの場合、計り知れない敗北の犠牲者だった。敵意に満ちた見知らぬ世界へ、突然に放り出されたようだった。自らのアイデンティティを、どこか遠くへ失ってしまったかのごとくに。(……) 過ぎ去った

⁹ *Ibid.*, p. 142.

美しい時間をともに耐え、今や消え去ったすべてを想起しようとして、郷愁者たち [nostalgici] は互いを求め合い、身を寄せ合っていた。¹⁰

語り手によれば、イタリアに戻ってから十分に快適な生活を再開した旧植民者であっても、「アフリカ病」に罹患するケースは少なくなかったという。アフリカの気候、穏やかでストレスのない生活、どんな雑用でもこなしてくれるエリトリア人の女中たち、港町マッサワの活気ときらめく海……痛みとともに思い起こされる失われた時間が、引揚げ者たちを結びつけていた。

じつは、著者デッローロもまた、これと似たような経験を持っている。デッローロは20歳のときに、生まれ故郷のアスマラを離れ、ミラノへ移住している。『アスマラよ、さようなら』では、語り手ミレーナが両親に移住の意思を伝えた際、母親はその決断を支持している。エリトリアはもう、未来ある若者のための国ではないと語り手の母親は考えていた。一方で、ミレーナの父親は、娘の移住に強く反対した。父親から言わせれば、エリトリアこそが自分たちの土地であり、娘にはそこに留まる義務があった。それでも、最終的には、父は娘のイタリア行きを容認する。

デッローロはインタビューに答える形で、移住して間もないころに味わった感情について、次のように語っている。

こうしてわたしはミラノへやってきました。とはいえ、はじめのうちは「なんて陰鬱なところだろう」と思っていました。そのうちに、じつに奇妙な状況を体験することになりました。エリトリアでは、わたしは白人だけれど、自分の家にいるように感じていました。イタリアでは、わたしは周りの人たちと同じ外見をしていて、同じ言葉話を話していて、みんなわたしをイタリア人だと思っていて、それなのにわたしは、自分が外国人であるように感じたのです！ やがて、時間とともに少しずつ、新しい環境に慣れていきました。季節を愉しみ、秋の色彩を味わうことも学びました。¹¹

イタリアでの学業を終えたデッローロは、まずはジャーナリストとして、やがては作家として、生まれ故郷であるエリトリアと新たな関係を構築していく。以来、齢80を迎え

¹⁰ *Ibid.*, p. 143.

¹¹ http://archivio.el-ghibli.org/index.php%3Fid=2&issue=00_02&sezione=7.html (2018年6月7日閲覧)。

る現在も、「アフリカに生まれたのにイタリア人であり、それでも自分をエリトリア人でもあると思っている」日々を生きつづけている。

V. 鳥たちの島モドク

『アスマラよ、さようなら』の物語は、基本的にはリアリズムの文体で叙述されているものの、ところどころに、幻想文学、あるいはおとぎ話を思わせる描写がちりばめられている。そもそも、作品の冒頭からして、リアリズムとは形容しがたい語り口が採用されている。

神は、鳥たちの島モドクを創造したとき、一種の興奮状態にあった。自身の代表作のひとつである紅海を見つめ、その色彩の美しさに酩酊し、水面を撫でるために腕を伸ばした。(……) わたしはそのとき、ありあまる美しさに目をまわしながら、神に願い事をした。どうか、この世に生まれさせてください。できることなら、モドクのそばで。神は、わたしの望むとおりにすることを約束してくれたけれど、それよりも先に片づける仕事があると言っていた。神が約束を忘れてしまわないよう、わたしは何百万年にもわたり神に手紙を書きつづけた。そしてついに、神はわたしの願いを聞き入れた。¹²

『アスマラよ、さようなら』の語り手は、このような経緯をたどって、モドクからそう離れていないアスマラに生を受ける。この記述を真に受けるなら、イタリア人植民者の第3世代として生まれたとはいえ、語り手の魂は悠久の過去から、エリトリアの土地に思いを寄せていたということになる。作中には、少女時代の語り手が、オマルというムスリムの船頭に、モドクについて尋ねる場面がある。少女にはもちろん、生前の記憶はない。

「その島はなんていうの？」

「モドク」オマルは答え、眼差しを虚空に据えた。

そのとき、あらゆる時間の広がりの中で1秒の断片を生きさせられた感覚に襲われ、わたしは当惑を覚えた。まるで、生涯をかけて、宇宙のあちこちの裂け目を旅してきたような疲労を感じた。

¹² Erminia Dell'Oro, *Asmara addio*, op. cit., p. 11.

「モドク……」わたしは繰り返した。「その島には行けないの？」

「權じゃ無理だ」オマルが、わたしの無知を大目に見るかのように微笑む。「モドクは遠い」

「それで、モドクにはなにがあるの？」

「白くて、サンゴに囲まれてる。鳥たちの島だ。一日中、鳥の鳴き声が聞こえる。ぜったいに卵を割っちゃいけない。鳥たちがモドクの主人だから」

わたしは黙りこくり、しばらく口を利かずにいた。はるか遠くの、見知らぬ世界への郷愁 [nostalgia] が、わたしの胸を押しつぶしていた。それは、あの最悪な日々を感じた鬱屈とも違う、はじめて味わう苦悩だった。¹³

このとき以来、語り手の少女は、まだ見ぬモドク、サンゴに囲まれた鳥たちの島への思いを募らせていく。ところが、彼女はけっきょく、モドクを訪れる機会を逸したまま、イタリアへ移住する日を迎えてしまう。旅立ちの日、語り手を乗せた船が少しずつ港から離れていく途中、彼女は不意に、胸を塞ぐような苦しみに襲われて息を切らす。そして、白いサンゴに囲まれた島の上に、もうひとりの自分を感じる。イタリアへの旅立ちは語り手にとって、もうひとりの自分との別れであり、自らの存在を2つに引き裂かれる経験にほかならなかった。第3部では、ジャーナリストになった語り手が、いまだエリトリアに暮らしている両親のもとを訪れる。そして、港町マッサワで老いたオマルと再会し、二人でモドクを目指す。朝まだきの島に上陸した語り手が空を見上げ、遠くからモドクを目指して飛んでくるペリカン、ユリカモメ、ツバメたちの姿を目にする場面で、物語は幕を閉じる。

VI. 朝鮮生まれの日本人作家が描く〈原郷〉の姿 —— 森崎和江との比較 ——

本稿を締めくくる前に、これまでの議論をより開かれた文脈へつなげるために、ある日本の作家の経験をデッローロの生と対照させ、両者の共通点を確認してみたい。その作家とは、日本統治下の朝鮮半島で生を受けた森崎和江である。

伝記的な事実に絞って見てみても、森崎とデッローロのあいだには共通点が多い。第一に、植民者の娘として植民地で生まれていること（デッローロは第3世代、森崎は第2世代）。第二に、幼少期から青年期にかけてを出生地で過ごした後、学業のために「祖国」

¹³ *Ibid.*, p. 125.

に渡っていること（ただし、1938年生まれのデッローロが戦後しばらくしてからミラノに移住したのに対し、1927年生まれの森崎は1943年の時点で福岡に渡っている）。第三に、祖国での学業を終えたのちに、作家の道を歩んだことなどである（デッローロはもともと、ジャーナリズムの世界で物書きとしてのキャリアを開始させた人物であり、この点も、ノンフィクション作家である森崎の経歴と重なる）。

しかし、本稿の議論にとってなにより重要なのは、二人の作家が生まれ故郷に抱いている意識である。朝鮮で過ごした年月を綴った森崎の自伝『慶州は母の呼び声——わが原郷——』には、次のような一節がある。

私の原型は朝鮮によって作られた。朝鮮のころ、朝鮮の風物風習、朝鮮の自然によって。私がものごころついた時、道に小石がころがっているように朝鮮の暮らしが一面にあった。（……）私は朝鮮で日本人であった。内地人とよばれる部類であった。がしかし、私は内地知らずの内地人である。内地人が植民地で生んだ女の子である。¹⁴

デッローロも森崎同様、「イタリア知らずのイタリア人」として、エリトリアの風物や自然に囲まれて育った女性である。森崎の著書の副題にある「原郷」という言葉は、「故郷」とも微妙に異なるニュアンスを持つ。ただ単に、自分の生まれた土地、ということにとどまらず、自分の核を形成した土地、いまなお自分の思考と感覚に影響を与えつづけている土地、といった意味合いを感じさせる¹⁵。このように考えるなら、デッローロにとってのエリトリアを指す言葉としても、「原郷」はいかにもふさわしい表現であるように思われる。

一方で、『慶州は母の呼び声』には、「故郷」という言葉が用いられた印象深い一節がある。この場面では、著者本人が韓国人との対話のなかで、自身（森崎）と弟の「ふるさと」について語っている。

「（……）ぼくにはふるさとないって言いました。どこにも結びつかないって言い

¹⁴ 森崎和江『慶州は母の呼び声——わが原郷——』洋泉社、2006年[1984年]、p.10。

¹⁵ 「原郷」の項を立てている国語辞典は多くはないが、たとえば以下に引く語釈は、森崎がこの言葉に込める意味にかなりの程度近いのではないか。「そこに帰れば心の安らぎが得られ、本来の自分が取り戻せる精神的なよりどころだと信じている、現実存在する(思い描いた)故郷」（『新明解国語辞典第七版』「原郷」より）。

ました。それは精神の故郷のことですけど。わたしも同じでしたから、いろいろ話しましたけど……。

敗戦後の日本は、自分で自分の骨を燃やして、その火がふるさとなのだと思うほかにない所でした。もうすこしがんばってみようって、そんなことしかわたしは言えなくて……」¹⁶

「ふるさと」を持たないと感じる著者が、それでも精神の拠り所となる土地について語ろうとしたとき、あえて選びだされたのが「原郷」という言葉だった。森崎の生と語りを追っていくと、植民地主義によって「ふるさと」を奪われたのは、被植民者だけではないことが伝わってくる。植民者の第二世代、第三世代のなかには、侵略した側としての罪の意識を自覚しながら、故郷喪失者としての苦しみにも耐えるという、二重の試練を引き受けざるをえなかった人びとがいる。「なんにも知らずに好きになってしまった、おわびのしようもない生き方をしていた」¹⁷という森崎の叫びには、生まれた土地を「ふるさと」と呼んで愛することのできない人間が抱く、苦悶と、悔恨と、おさえきれない感謝の念が込められている。

森崎が幼少期を送った家庭には、朝鮮人の女性が通いの家政婦として出入りしていた。日本人の両親のもとに生まれ、日本人の子弟が通う学校に在籍していた森崎にとっては、家庭内の家政婦たちが、直接に触れ合う機会のある数少ない朝鮮人だった。民族意識や差別観を育む機会もなく、「遙かな昔から、この世は日本人と朝鮮人とがまじりあって住んでいたのだと思っていた」¹⁸少女時代、森崎は彼女たちを「ネエヤ」や「オモニ」と呼び、無垢な親しみを寄せていた。

オモニとはおかあさんということばである。オモニの生活を知らず、そのことばも知らず、しかもその香りを知り、肌ざわりを知り、負ってもらっては髪の毛を唇につけ、やきいもを買ってもらい、眠らせてもらった。昔話をしてもらった。私の基本的な美感を、私は、私のオモニやたくさんの無名の人びとからもらった。¹⁹

¹⁶ 森崎、前掲書、p. 227。

¹⁷ 同上、p. 240。

¹⁸ 同上、p. 24。

¹⁹ 同上、p. 12。

森崎は、オモニたちの話す言葉を知らない。森崎にもわかる言語で昔話を聞かせてもらうこと自体が、そのまま侵略なのであるという事実は、幼い少女の思考の埒外にある。森崎のかかる追憶は、イタリア語を通じてエリトリア人女中と交流していたデッローロの過去を彷彿とさせる。少女時代の二人には、罪の意識も、差別の意識もない。同じ時間、同じ空間を共有し、自身の世界を広げつつ豊かにしてくれる存在への信頼と愛着が、往時を振り返る両者の言葉の端々からにじみ出ている。

祖国へ戻り、物書きとなっても、二人は原郷と向き合いつづけた。デッローロはジャーナリストとして、エチオピアの圧政に苦しむエリトリアの現状を長年にわたりレポートし、森崎はノンフィクション作家として、朝鮮や東南アジアの娼館に売られていった「からゆきさん」の足跡をたどっている。祖国にありながら原郷を想う二人の作家は、日本とイタリア、朝鮮とエリトリアの歴史に潜む共通点を浮き彫りにし、より普遍的な文脈に接続するための手がかりとなる存在と言えるだろう。

VII. おわりに

デビュー作『アスマラよ、さようなら』を1988年に発表した後も、デッローロはエリトリアとかかわりのある小説を書きつづける。2016年に刊行された『目の前の海』の内容は、難民としてイタリアに流れ着いたエリトリア人青年ツェゲハンスの実体験をもとにしている。日々の報道が伝えているとおり、近年はエリトリアからヨーロッパへ、多くの難民が流入している。21世紀の難民を描くデッローロの筆致は、植民地時代のエリトリアでイタリア人家庭に生まれたことにたいする、一種の償いのようにも読める。

エリトリアからやってきた僕たちの大部分は、かつてイタリアがエリトリアを植民地にしたことを知っていた。エリトリアには一世紀近くにわたって、たくさんのイタリア人が暮らしていた。アスマラの街を作ったのもイタリア人だった。けれど、僕らを見つめるイタリア人の眼差しは、僕らの国がどこにあるのかさえ分からないと言っているみたいだった。エリトリア人だろうと他の国の出身者だろうと関係なかった。僕らは「アフリカ人」だった。僕らはみんな、助けを求める難民だった。
(……)

僕らと話をするために足をとめる人もいた。エリトリアという国名を聞いたことがある人は滅多にいなかった。僕らは自分の国の名前を、二度繰り返さなければな

らなかった。イタリアにやってくる前、僕らは幻想を抱いていた。現実には、僕らが生まれたアフリカの小国のことなど、誰ひとり知らないのだ。

「アスマラはイタリア人が作ったんだ」ブラハネおじさんはよく子供たちに語っていた。あの人は、僕らの国の歴史をなにもかも知っていた。「イタリア人がこの土地にやってきて、エリトリアを小さなイタリアに変えたんだ。多くのイタリア人がここで生まれ、ここで死んだ。サン・ミケーレ教会の近くには、イタリア人の墓地だってある」²⁰

植民地主義の歴史にたいするイタリア人の無知・無関心が、デッローロが執筆に向かうひとつの原動力となっていることは間違いない。あるインタビューによれば、デッローロは1999年に、『石の王 (*Il re di pietra*)』という未発表の長篇を完成させている。これは、ファシズム政権によるエチオピア侵攻の実態を詳細に描いた作品とのことだが、その内容の迫真性ゆえにか、刊行を引き受ける出版社はついに見つからなかった。しかし、インタビューが行われた2015年の時点でも、著者は『石の王』の刊行を諦めておらず、いまだ原稿に手を入れている最中だと語っている²¹。この作品が無事に刊行されれば、イタリアの読者はふたたび、同胞がアフリカの大地に刻みこんだ歴史を振り返るための、格好の機会を得ることになるだろう。

前節で触れた『慶州は母の呼び声』のなかで、森崎はこう語っている。「最後の砦のようにわたしたちが、朝鮮人の若者や少女とひそかに保ち合おうとしたもの、個々の人間性への信頼やその固有な文化への個人的な愛は、政治的侵略よりもなお深い」²²。エリトリアで過ごした日々への「信頼」と「個人的な愛」が、デッローロの文学の土台を形成していることは疑いをいれない。森崎は著書のなかで、幼いころの自分は民族意識というものに無自覚だったと述懐しているが、デッローロもまた、少女時代には、自分のことをイタリア人ともエリトリア人とも思っていなかった、と語っている²³。祖国 (homeland) とは本来、「自分は何者であるか」を意識する必要のない土地である。けれど、本稿で触れた

²⁰ Erminia Dell'Oro, *Il mare davanti: Storia di Tsegehans Weldeslassie*, Milano, Piemme, 2016, pp. 121-122.

²¹ http://www.iperistoria.it/joomla/images/PDF/Numero_6/monografica_6/Luchetti_intervista_dell_oro.pdf (2018年6月7日閲覧)

²² 森崎、前掲書、p. 234。

²³ http://www.iperistoria.it/joomla/images/PDF/Numero_6/monografica_6/Luchetti_intervista_dell_oro.pdf (2018年6月7日閲覧)

二人の作家は、日本とイタリアという「祖国」に移り住んだのちに、自らのアイデンティティを問い直す経験を強いられている。記憶のなかの原郷は、「あなたは何者であるか」を問い詰めることなしに、彼女たちを受け入れ、養ってくれた。両者の作品の通奏低音には、何者でもない存在として生きることができた日々への郷愁がある。植民者の第二世代、第三世代として生まれた作家たちが、祖国から原郷を見つめながら紡ぐ言葉は、「ふるさと」のようでありながら「ふるさと」とは呼びがたい土地へ捧げられた、静かで力強い讃歌のように響いている。